

小川 俊一

私は昭和9年9月11日、高田市寺町の善導寺境内で生まれた。当時、高田商工の国語教師であった父（小川 保）が、この境内の民家（隠居家らしい）に下宿していたためである。しかし、私が2歳になるちょっと前（昭和11年）に、父が淡路島の洲本高女に転任したので、善導寺界隈の記憶が全くないが、生前の父から高田時代の話をよく聞いていたし、また写真も何枚か残っているので、寺の周囲の景色がいつしか目に、ぼんやりと浮かぶようになった。

移り住みし善導寺内の隠居家より
小栗美作の墓見えたりき

これは父が詠んだものである。昔は、昼なお暗い老杉の森が亭々とそびえ、朝夕のしばらくは何百と集まる鴉の大群が泣き騒ぐ、うっそうたる森だったとのことである。しかし、

善導寺の鴉騒ぎし老い杉も
戦時に伐られはてしと （小川 保・以下同じ）

とあるように、現在では昔の面影はないのかも知れない。

晩学の父が、教師としての人生をスタートするため、高田にやって来たのは、昭和3年28歳の時であった。恐らく東京から信越線の夜行列車に乗って、国境のトンネルを抜けたのだらう。

たに
溪低くもみじを暗に感じつつ
アプト式はゆるく碓氷峠をのぼる
軽井沢の夜中を駅に降り立ちて
そばのあつきをいそぎすすりし

そして新井あたりで朝になり、登校の通学生が乗り込んで来て、その制帽が「雪の六華をかたどった中に『業』の字を現していた」ことから、自分の赴任先である高田商工の生徒であることに気がついた。これが父と商工との最初の出会いだだったのである。

信濃より越後に汽車は入らんとす
妙高の尖り穂空を抜く見ゆ

その朝「よく澄んだ空の一角にくっきりとそびえていた妙高の頂き」は、若干の気負いもあったであろうこの28歳の青年教師の目に、どんなに雄大に映ったことだらう。しかし、高田駅に下り立ったこの一瞬が、恐らく、のちに

「アルプス連峰脊に負いて……」

という校歌の出だしになって結晶したのだと思われる。

こんな歌からもわかるように、父にとって高田こそは、希望にみちた人生への門出の地であったし、生徒を通じて繰返し、繰返し、懐かしむことの出来た青春の原

点ともいふべきものだった。この地でたくさんの同僚と教え子に出会い、その上、彼らとその後継者に歌い継がれる校歌を作詞できたなんて、何と幸運なことだったろう。

日本アルプス脊に負いてと歌いたる
校歌の起白に若き日憶う

さて私の家に、父の遺品の古い置時計がある。その裏面に金字で
贈 我等ノ小川先生
昭和11年5月 巖志会

と書いてある。高田→淡路島→仙台→横浜と旅して来たこの時計は、実は、昭和9年4月商工入学の同窓生49名の方々から父がいただいた記念品なのである。このクラスは父が3年まで持ち上りで教えたため、その後も父が特に気づかい、懐かしんだメンバーで構成されている（級長は大竹良一さん、副級長は三上重信さん）。

昭和13年2月の或る日、卒業を目前にした巖志会級友の方々が、小遣い銭を集めて、当時淡路島にいた父のところへ旅費として送ってくれたことがある。感激した父が、早春の北陸本線を通して、再会のため高田を訪れたことは言うまでもない。

教え子のあまた戦いに死にて20年
アルバム見つつ吾の老いたり

ところで創立60周年記念誌出版の取材のため、横浜の我が家をたずねて下さった石川先生から、思いがけなくも巖志会の名簿をいただいた。数えてみると32名の方々がお元気で活躍中で、早速、父の霊前に報告した。たしか入学時は49名おられたはずだが……。この世代の方々と戦争とのかかわりあい改めて感じさせられたことである……。合掌。

また去年は、甲子園で父の作詞した校歌が全国に放送される栄に浴した。残念ながら私は所用のため、そのテレビ中継を観ることが出来なかったが、もし父が生きていたら、さぞかし…と感慨ひとしおであった。熱血漢の部類に属す父は、ご他聞にもれず高校野球が大好きで、短歌もいくつか残っている。

勝も若さ敗るも若さ高校野球の
流汗淋漓いさぎよきかな
熱球にいのち凝りたる甲子園
高校野球の若さ快し
甲子園に校旗仰ぎて校歌聞く
若きら感激見るもすがしき

父が亡くなったのは昭和44年8月19日の朝8時。奇しくもそれは夏の高校野球の決勝戦の日だった。三沢高・太田投手（現近鉄）と松山商高・井上投手が、前日18回を投げ合って相ゆはず引分け、その日、決勝再試合が行われた。連日30度を越す東北大学病院の窓から、中継放送の音が流れていたのを思い出す。

甲子園の決勝戦の朝父逝きぬ
延長18回の行方見ずして（俊一）

巖志会のメンバーの入学した年に高田で生を受けた私も、いつしか不惑の40代になってしまった。その後、機会なく、一度も訪高したことがないが、父のことを

思い出すたび年々故郷への思いが強まる今日この頃である。もっとも雪国生まれの血は争えず、スキーは今でも大好きで、越後湯沢や赤倉までは行くのだが……。結局私のイメージにある高田はどんな高田だろうか？最後に、父の短歌を媒介にして、私の心に映像として浮かんでいる高田をモンタージュしてみたい。第一がこんな街のイメージである。

街並の長きにつづく雁木下

下駄ひびかせてどこまでも歩きし

この歌から父が歩く下駄の音が聞こえてくるようでもあり、また自分が歩いているような気持ちもして、生まれ故郷とは不思議なものだと思う。

榊神社の境内よぎりて街に出で

筆買ひし店は鈴木と言ひし

今でもこの店はあるのだろうか？また父がよく行ったらしい春陽館、西沢書店などはどうなのだろうか。とにかく散歩の好きな父だった。そしてその足の向くままを続けてたどれば……。

稲田橋わたりて香魚を釣り居れば

山砲試射の遠くひびきし

春日山城址の茶屋にコスモス咲き

花のゆれ聞ゆ日本海展^{ひら}く

蒋介石の命名という料亭の柳糸郷

今もありやあらずや

こうやってつづつて来ると、やはり亡父を通じて私の心の中にある高田は「古き良き時代の高田」であり、所詮遠い日の幻想交響曲なのかもしれない。しかしそれでもいい。私は近いうちにぜひ高田を訪れてみたいと思う。そしてそれはやはり冬がいい。たとえ外は白い吹雪に包まれていても、内には赤々と燃えるいろりの火があり、その上に煮物の湯気がある。それさえあれば、どんな頑なな人の心も、ほのぼのと溶けてしまうにちがいない。わたしにとっての雪国とは、そんなイメージの世界なのである。

銘酒妙高は甘口にしてうまかりき

高田の人皆情あつくして

(昭和39年小川保詠める)

(昭和52年4月17日記)

<自己紹介>

小川俊一(42) 昭和9.9.11 小川 保の長男として新潟県高田市生まれ。
昭和32年東北大学社会科学卒。現在、旭化成工業(株)旭リサーチセンター主任調査
役・次長待遇として勤務。一男一女。自宅は、横浜市鶴見区。